唐長安城と關中平野の灌漑システム

妹尾達彦

本報告の目的は、唐長安城の政治・經濟動向と、關中平野中部の水利灌漑組織との關係を主に分析することで、とくに、九世紀における長安の都市圏の形成を論じることである。

ここでいう長安の都市圏とは、都の長安の經濟・文化・政治の影響力が、直接および地域のことで、長安の位置する關中平野の中央部をさしている。

安史の亂（七五五～六三年）後における、長安をかこむ國内外の政治・經濟動向の變貌は、關中平野の軍事的、經濟的重要性を一擧にたかめさせ、長安をかこむ地域の經濟・文化・政治的統合を加速させた。その結果、長安とその周邊地域は機能的に連結して、現代の首都圏に類似した一つの都市圏をつくりだしてゆく。

本報告では、一九九七年から九九年にかけて實施した、唐長安城と關中平野の灌漑施設の實地調査の知見を活用して、九世紀における關中平野中部の水利灌漑組織の整備の實態を明らかにし、水利・交通・商業・行政組織が相互に密接に關連する、長安の都市圏が形成されてゆく過程を分析する。

それとともに、王都の都市圏の形成が、後代にあたえた政治的、經濟的、文化的影響についても、論じてみたい。

メコン下流域における首長制成立への動き

新田榮治

メコンとその支流の流域には前三世紀～後二世紀のヘーガー1式銅鼓が分布する。これらの銅鼓は墓葬の副葬品として出土する。出土地はいずれもメコンおよびその支流に沿った交通運輸の要衝である。銅鼓は水系に形成された社會單位の有力者に、その威信財として受容された。銅鼓型式の時空的分布から、その受容は本流から中小支流へ廣がっていった。このような政治勢力形成の背後に、メコン水系を介した交易と運輸の活潑化、および減水期稻による水稻栽培に加えて、東北タイの生態環境を利用した鐵ノジュールを原料とする鐵や、乾季の地表面に生じる鹽華を原料とする鹽などの生産によって蓄積された富があった。東北タイでの經濟的發展は前三世紀頃から始まっている。その後、經濟的發展とともに、人口の集中が生じ、環濠で圍った居住空間（環濠集落）が現れてくる。

これと同じような社會變動はメコン流域の各地で生じている。メコンを介して東北タイと關係をもったベトナム南部ドンナイ省では、前二世紀～後一世紀ころ、中國的武器であった銅戈が威信財として機能し、巨大石室をもつ墓がその地の有力者の墓として築かれた。

東南アジアでは、それぞれの地域性に應じたさまざまな形で、社會的統合化が進展していた。それは後一世紀以降に現れる初期國家形成、文明化への前史であった。